

⑥ 近世

とくがわいえやす ぼくふ けいちよう  
 徳川家康が幕府を開いた慶長  
 8年(1603)から慶応3年  
 (1867)までを江戸時代または  
 近世といいます。犬田神社前遺  
 跡からもこの時代の遺物が見つ  
 かっており、現在の集落へとつ  
 ながっていきます。



1 陶器の皿(近世、17～18世紀)

⑦ 煮炊きの道具の移り変わり

ここでは煮炊きを使う道具の移り変わりを見ていきましょう。縄文時代から古墳時代中頃までは、煮炊きは地面を少し掘りくぼめた「炉」で行いました。そこに土器を置いて米などを煮て食べていたようです。その後大陸から「竈」が伝わり、土器で湯を沸かして、その蒸気で米を蒸す道具が出現します。平安時代末～中世になると鍋や釜で食材を煮たり、米を炊いたりするようになり、現代と似た調理法になるようです。



1 縄文土器深鉢  
 (縄文時代中期、約5000～4500年前)  
 土器の下の方が火に当たって変色しているの、煮炊きに使われていたと考えられます。



2 ※参考資料 弥生土器広口壺  
 (弥生時代後期末、3世紀、茨城町矢倉遺跡出土品)  
 弥生時代には米の栽培が本格化します。当時の茨城県ではこうした土器で米を調理していました。

左写真：茨城県教育財団1998より転載



3 土師器台付甕  
 (古墳時代前期、4世紀)  
 甕の下に台を付けて、下から火が当たりやすいように工夫されています。この時代までは炉を使っていました。



4 土師器甕(左)と甕(右)  
 (古墳時代中期、5世紀)  
 このころから竈が普及します。竈に

水を入れた甕を置き、その上に甕を置いて中に布などで包んだ米を入れます。甕のお湯から蒸気が甕の穴を通して上へあがり、米を蒸す仕組みです。



5 土師器甕(右、平安時代前半、9世紀)と支脚(左、奈良時代、8世紀)  
 火を受けやすいように甕の胴が少し長くなりました。支脚とは竈の中で甕を下から支えるための道具です。



6 内耳鍋  
 (戦国時代、16世紀)  
 中世には囲炉裏で鍋を使った調理が現れます。鉄鍋や土鍋が使われ、現在と似たような食生活が見られたようです。



第12回  
 企画展

犬田神社前遺跡

桜川市内の遺跡I



真壁伝承館歴史資料館  
 MAKABE DENSHOKAN MUSEUM

## はじめに

人類がこの日本列島にやってきてから、現在に至るまでの数万年間に残した生活の痕跡が「遺跡」です。この遺跡は現在では地面の下に眠っており、普段目には見えません。しかし、建物や道路などの建設に伴って発見された遺跡は、発掘調査を行うことによりその姿を今に見せることがあります。

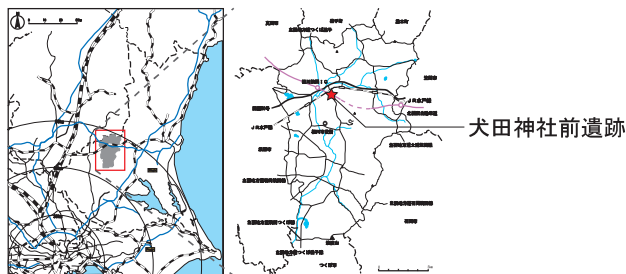
桜川市内にも160ヶ所以上の遺跡が存在しています。今回はその中から「犬田神社前遺跡」を取り上げて、発掘調査により出土した土器や石器などの遺物を展示します。我々の先祖の生活の全てを見ることはできませんが、豊富な出土品により、その一端を垣間見ることができると思います。ぜひ昔の生活を想像してみてください。

## 「犬田神社前遺跡とは」

「犬田神社前遺跡」は市の北部、犬田地区にあります。遺跡は北関東自動車道建設工事に先立って、平成14年(2002)から平成17年(2005)にかけて、財団法人茨城県教育財団によって発掘調査が行われました。

発掘調査の成果は、発掘調査報告書としてまとめられています。それによると総発掘面積は17,478㎡で、遺跡からは竪穴住居跡や掘立柱建物跡、溝跡など多くの遺構(昔の人の生活痕跡)が見つかりました。そして、出土した土器などにより、縄文時代から江戸時代(近世)までの幅広い時間に渡って人々が生活していたことが分かっています。

なお、遺跡の名前にある「犬田神社」は、遺跡のすぐ北側にあります。この神社は、言い伝えではヤマトタケルが経津主神・武甕槌神・気吹戸主神の三神を祭ったのに始まるとされる古社で、源義家が奥州へ向かうときに参拝した、という伝説も残ります。



### 例言

- この図録は、平成31年2月2日～5月12日を会期とする真壁伝承館歴史資料館第12回企画展『一桜川市内の遺跡 I - 犬田神社前遺跡』に関連して作成したものです。
- 本展示の企画、図録の編集・執筆は桜川市教育委員会生涯学習課越田真太郎・古寺恵が担当し、生涯学習課職員の手力を得て行いました。

参考資料 財団法人茨城県教育財団 1998『茨城県教育財団文化財調査報告第135集 矢倉遺跡 後口原遺跡』  
 2004『茨城県教育財団文化財調査報告第229集 犬田神社前遺跡1』  
 2005『茨城県教育財団文化財調査報告第248集 犬田神社前遺跡2』  
 2007『茨城県教育財団文化財調査報告第270集 犬田神社前遺跡3』

## ⑤ 中世

鎌倉時代から南北朝時代、室町時代、戦国時代、安土桃山時代までの約400年間を総称して「中世」と呼びます。中世は武士が活躍した時代ですが、犬田神社前遺跡の付近には「鎌倉街道」とも呼ばれる古道が通っていたと伝わり、その道を押さえる有力者(武士?)が住んでいた可能性があります。遺跡から出土した銅製の観音像はその有力者が持っていたものと思われます。また、別の場所から見つかった「権」は棹秤のおもりとして使うもので、道沿いに物を売る市があったのかもしれない。

他にも「かわらけ」と呼ばれる素焼きの皿や、播鉢、曲物、鉈など生活の道具も出土しています。珍しいところでは、「温石」という石を温めて布などでくるみ、懐に入れて暖を取るための道具が出土しています。



- 銅造観世音菩薩立像 (鎌倉時代、13世紀)
- 権 (戦国～安土桃山時代、16世紀)
- かわらけ (平安時代末～鎌倉時代初め、12世紀後半～13世紀前半)
- 播鉢 (戦国～安土桃山時代、16世紀)
- 曲物 (戦国時代頃?、16世紀?)
- 鉈 (戦国～安土桃山時代、16世紀)
- 温石 (中世、13～16世紀)

## ! ポイント

遺跡から「天目茶碗」と呼ばれる茶碗が出土しました。これは抹茶を飲むときに使うもので、別の場所から抹茶を入れる「茶入」も見つかりました。戦国時代に広まった茶の湯がこの地方でも行われていたことが想像されます。



- 天目茶碗 (戦国～安土桃山時代、16世紀)
- 茶入 (戦国～安土桃山時代、16世紀)

④ 奈良・平安時代

奈良の平城京に遷都した和銅3年(710)から、鎌倉時代の始まる12世紀の末までの時代を奈良・平安時代と呼びます。

この時代に使われた器は、古墳時代のものとは少し形が変わっていることが分るでしょうか?特に器の底に「高台」という円形の足が付くものが出てきます。これは置いたときに安定させるための工夫と思われるのですが、現代の器にも通じる変化です。



1 須恵器の高台付坏(左)と蓋(右) (奈良時代、8世紀) 2 平安時代前半の土師器 (9世紀後半)  
3・4 平安時代中頃の土師器 (10世紀後半～11世紀前半) 5 須恵器長頸瓶 (平安時代前半、9世紀中頃)

! ポイント

平安時代の中頃の住居跡から鉄鏃という弓矢の矢じりが6点出土しました。本来は矢の端について、弓もあったと思われますが、木や竹の部分は腐ってなくなっていました。一軒の家からまとまった数の鉄鏃が出土することは珍しく、武器を持つ特殊な人物が住んでいた家なのかもしれません。平安時代の中頃は、平将門のように有力者や上層農民の中に武装する人々が現れはじめ、のちの武士につながっていく動きが見られる時代です。この家の住人もそういった人物だったのでしょうか。



6 鉄鏃 (平安時代中頃、10世紀後半～11世紀前半)  
※6点中5点展示しています

① 縄文時代

犬田神社前遺跡で、人々の生活痕跡が最初に現れるのは、今から5000～4500年ほど前、縄文時代中期と呼ばれる頃のことです。

縄文時代に作られた土器を縄文土器と呼びますが、特にこの中期は、重厚で装飾性豊かな土器が多く作られ、新潟県などを中心に有名な火焰型土器が作られた時代でもあります。市内から火焰型土器は出土していませんが、犬田神社前遺跡出土の土器も様々な文様に彩られています。



1～4 縄文土器深鉢 (縄文時代中期、約5000～4500年前)

5～7 縄文土器深鉢の突起部 (縄文時代中期、約5000～4500年前)



3



4



5



6



7

! ポイント

縄文土器の見どころは色々ありますが、注目ポイントは口縁部の文様です。口縁部とは土器の口の部分、縁の部分です。縄文土器の口縁部は波打ったようになっていることが多く、波状口縁といいます。そしてここに装飾的な突起が付きまします。突起の中には、人物や動物(イノシシやヘビ、カエルなど)の形を表現したと思われるものもあります。なぜそうした土器を作ったのかには諸説ありますが、難しいことはともかく、その不思議な造形をご覧ください。みなさんには何に見えますか?

やよいじだい  
② 弥生時代

縄文時代中期に暮らしていた人々は、どこかへ行ってしまったのか、姿を消してしまいます。しばらく空白ののち、次に姿が見えるのは弥生時代の後期（今からおよそ2000～1750年前、紀元1～3世紀）です。弥生時代の土器は縄文土器に比べて薄手で、文様も簡素なものが多くなります。残念ながら遺跡から出土する弥生土器は破片が多く、形がそろったものは少ないのですが、縄文土器との違いは分かるかと思えます。

なお、この頃の北関東では、弥生時代でも土器に縄目の文様、すなわち「縄文」をつけることがあります。弥生土器なのに縄文・・・という不思議な感じがしますが、

この時代、この周辺の土器の特徴の一つです。



1 弥生土器高坏  
2 弥生土器壺  
3 弥生土器甕  
(いずれも弥生時代後期の  
終わり頃、3世紀)

下の遺物は紡錘車と呼ばれる道具で、植物の繊維から糸を紡ぐときに使う道具です。できた糸からさらに布を織り、服などを作っていたのでしょう。

実はその布の痕跡も見ついています。それは5の土器に見えるものですが、これは粘土から土器を作るときに地面にくっかないよう布を敷いていたために布目が写ったものです。ちなみに6は布ではなく木の葉を敷いたのでその形が写っています。



布目の痕跡  
4 紡錘車  
5 弥生土器の底（布目の痕跡）  
6 弥生土器の底（木の葉の痕跡）  
(いずれも弥生時代後期の終わり頃、3世紀)

こふんじだい  
③ 古墳時代

弥生時代の次は古墳時代で、皆さんもご存知の古墳が作られた時代です。犬田神社前遺跡から古墳は見つかっていませんが、その時代の住居跡などが出土しています。古墳時代の土器は縄文・弥生と同じ素焼きで茶色いもので、土師器と呼んでいます。そこに中国・朝鮮半島から須恵器と呼ばれる土器が入ってきます。須恵器は窯で焼かれ、硬質で灰色なのが特徴です。須恵器は始め現在の大阪府あたりでしか作られておらず、次第に愛知県や静岡県付近、しばらくして茨城県内でも作られるようになりました。しかし、当初は須恵器の器は珍しく、何とか少しでも新しい雰囲気を取り入れたいと思ったのか、この時代の住居からは、須恵器の器（「坏」という碗よりも浅く、皿より深めの器）の形をまねた土師器の器（坏）が数多く出土します。



1 古墳時代中期～後期の土師器  
(5世紀末～6世紀前半頃)  
2 須恵器の坏  
(古墳時代中期、5世紀後半)  
3 古墳時代後期の土師器  
(6世紀末～7世紀前半頃)



！ポイント

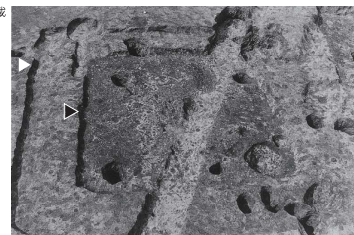
遺跡からちょっと変わった堅穴住居跡が見つかりました。その住居跡は、最初に建てられた建物を壊し、大きさを拡張して同じ場所に建て替えていたことが調査により分かりました。そして、古い住居からは弥生土器だけが、新しい方の住居からは弥生土器と古墳時代の土器と一緒に見つかりました。つまり、この住居には世の中がちょうど弥生時代から古墳時代に移り変わる頃に生きていた人たちが暮らしていたのです。

ここからは想像の世界になりますが・・・古い家を建て増したのは家族が増えたからで、新しい家では2世帯同居だったのでしょうか。そして、母親世代は昔ながらの手に慣れた弥生土器を使い、娘世代は最新式の古墳時代の土器を使う・・・そんな景色があったのかもしれない。



1 古い家から出土した弥生土器  
2 新しい家から出土した弥生土器  
3 新しい家から出土した古墳時代の甕

右写真：茨城県教育財団 2005より転載



古い家（▼印）を拡張して新しい家（▽印）を作った様子。見えているのは家の床（土間）の部分と柱穴です。倍の広さになりました。



3  
▼印が須恵器をまねた坏



4 古墳時代後期の土師器・須恵器（7世紀後半）